



ごく普通の暮らしを、ごく普通にしたい。

～あらすじ～

根拠の希薄なダム建設のために、半世紀もの間、
人生が翻弄されつづけてきた 13 世帯の暮らしと戦いの物語。

長崎県川棚町こうばる地区は、夏には蛍が舞い、子供たちが川で泳ぐ豊かな自然に囲まれた美しい里山です。ここにダム建設の話が持ち上がったのが半世紀ほど前。以来、こうばる地区の住民たちは、ふるさとを守るために反対運動を展開してきました。現在残っている家族は、13 世帯。長い間、苦楽を共にしてきた住民の結束は固く、幼い子供からおじいちゃんおばあちゃんまでが、まるで一つの家族のようです。朝、子どもたちが学校に行く、父と子がキャッチボールをしている、田植えや稲刈りをしている、おばあちゃんたちがおしゃべりをしている。それは一見、ごく普通の日本の田舎の暮らし。しかし本当は「ごく普通」ではない。ダム建設のための工事車両がいつ侵入してくるかわからないため、現役を引退した世代のおじいちゃんやおばあちゃんたちが、バリケード前での見張りを続けているのだ。雨の日も風の日も、真夏も真冬も。公共事業という名のもとに、住民の合意を得ず、すすめられようとしている石木ダム。本作では、そんな不条理な状況にも関わらず、明るく前向きに日々を生活しているこうばるの人たちの姿を描いている。

この映画で伝えたいこと

長崎県川棚町こうばる地区は、

夏には蛍が舞い、子供たちが川で遊ぶ豊かな自然に囲まれた美しい里山です。

ここにダム建設の話が持ち上がったのが半世紀ほど前。

以来、こうばる地区の住民たちは、ふるさとを守ろうと反対運動を展開してきました。

現在残っている家族は、13世帯。

半世紀もの間、苦楽を共にしてきたこうばる地区の方々の結束はとても固く、

幼い子供からおじいちゃんおばあちゃんまでが、まるで一つの家族のようです。

いつ工事がはじまるかもしれないという緊迫した状況の中でも、

明るく前向きに日々の暮らしを営んでいます。

この作品は、そんなこうばるに暮らす人たちの日常を描くドキュメンタリー映画です。

私は、ここでの暮らしの描写を通して、

こうばる地域で起こっていることが、特別な地域の、特別な人たちの問題ではなく、

ふるさとを持つ日本人の誰もが関わる問題であることを伝えたいと考えています。

賛成、反対を問う映画ではありません。

まず、見てほしい。こうばるの暮らしを感じてほしい。

その暮らしが、公共の福祉と引き換えに、失われようとしています。その事実を知ってほしいのです。

ダムはほんとうに必要なか、必要じゃないのか。

公共の利益か、自分のふるさとで生きる権利か。

その選択について、考えるきっかけを提供できる映画にしたいと思っています。

プロデュース / 監督 山田英治

◆プロデューサー/監督

山田英治

早稲田大学政治経済学部卒業後、広告代理店にコピーライターとして入社。

自動車、ビール、不動産、電力会社など、数々のCMを担当。

その一方で、映画監督、脚本家としての活動も展開。

東日本大震災以降は、社会課題の解決のために企業を変えていくCSV事業の企画提案を担当。

NPO法人Better than today. 代表理事。

「ほたるの川のみもりびと」は、ドキュメンタリー初監督作品。

○映画

「鍵がない」(監督脚本)

「春眠り世田谷」(監督脚本)

「プラットホームアットホーム」(監督脚本)

「Wood Job!〜神去なあなあ日常」(企画原案)

「帰れない二人」(監督脚本・WEBムービー)

「ほたるの川のみもりびと」制作中

○TVDドラマ

TBS「階段のうた」(演出)

○脚本

TVドラマ「NHK中學生日記」

映画「リハビリ刑事」

WEBムービー「サポステ」(監督河瀬直美)

○作詞

「世界で一番頑張ってる君へ」(HARCO)

「ウェイクアップパパ」(NHKみんなの歌)

「やさしい朝」(空気公団)

「ここにいるよ」(空気公団)

国家権力の元、強引に迫ってくる妥協のない自然破壊のなかで、おだやかな人間のころそのままに里山を守ろうとする人々の淡々とした描写が美しい。決していきりたつこともなく、しかし粘り強く手をつなぎ、真剣にたたかう人間の力に感動した。

椎名誠（作家）

国や行政が一方的に決める。住民は反対する。国や行政は圧倒的な人員と機材で住民を圧倒する。例えば米軍基地。例えば原発。日本中で見かける光景だ。僕たちは弱い。国は強い。でもあきらめない。だってこんなに美しい。こんなに豊かだ。

森達也（映画監督）

心の豊かさは、その人の暮らしを取り巻く自然の豊かさだという。命をかけてまで自然を守ろうと生きるこうばるの人々こそ、静かに美しい光を放つあのホテルの群れのようだ。

東田トモヒロ（ミュージシャン）

中国であれば、住民が強制的に立ち退きさせられて終わりだ。民主主義国であれば、こんなに美しい暮らしが営まれる村をなくすべきなのか、国中に大議論が巻き起こるだろう。どんどん中国のようになっていくのか、民主主義国にとどまるのか、石木は日本の分岐点だ

藻谷浩介（エコノミスト）

世の中には正解がない問題だらけだ。エネルギー、外国人労働者、教育、いろんな問題にはいろんな「答え」があって、議論をすることで最適解を求めることが重要だ。石木ダムは行政と住民たちで議論に議論を重ねるべきだ。

田原総一郎（ジャーナリスト）

私たちこそが危険だと思った。

戦う人たちを勝手に「過激な人々」とイメージする私たちこそが。

この映画は見事に、50年以上もアメニモマケズ、カゼニモマケズ、戦い続けた人たちの本当の姿を描き、

その力でイシキ変容させている。

丹下紘希（人間、ときどき映像作家、たまにアートディレクター）

「この映画を観ると、ただの傍観者ではいられなくなるはずだ。小さな美しい里山で起きている出来事の行方は、その地で豊かに暮らす住民の人生だけでなく、これからの日本の民主主義の在り方をも左右するからだ。より良い未来は私たちの手の内にある。まずはイシキから。」

末吉里花(一般社団法人エシカル協会代表理事)

長崎で起きていたことを、知らなかった！知れば私も、この里山を守りたい。ここには守りたい暮らしがある。子らが小さな命と触れ合える森や川、野山。祖父たちが耕し、米や野菜を育ててきた田畑。命育むふるさとを、奪うな！

渡辺一枝(作家)

今ここの地にダムが必要か？

今を生きる全ての人に関係する問題。未来の人に恨まれない選択のために、失われる大切な環境に今一度目を向けてみよう！

伊勢谷友介(俳優・映画監督)

ここには理不尽なダム建設計画によって故郷の土地を追われようとしている人々の戦いの日々と、ユーモアと優しさに満ちた日常と、そして彼らが愛してやまない自然との繋がりが、暖かな視線で描かれています。ぜひ個人的な視点で、つまり人間的な視点で彼らの現状を観て欲しいなと願っています。

ロバート・ハリス(DJ・作家)

ご存知でしたか？これから日本は80余のダムが建設予定だって事。

これからどんどん人口が減っていく、特に地方の人口が減っていくのに、なぜ自然を破壊していくようなダムを作るのでしょうか？一基500億として80カ所、ざっと計算しても約4兆円のお金がかかるんです。

そのお金は誰が払うのでしょうか？

そのつけを私たちの子供たちに負わせるのですか？

日本に生まれてきたら同時に多額の借金を背負ってしまう未来の子供たちをもっと思いやりましようよ。

私たちはもっとつつましく生きていけるはずです。

若者が減り収入が増えないなら経費を少なくするって普通に考えられます。

誰のためのダムなのでしょうか？

本当に必要なのでしょうか？

一旦決めたから実行するのではなく、今一度踏みとどまってみる勇気を持ちましょう。

この「ほたるの川のまもりびと」はそのことを考えさせてくれました。

普段の生活をもっともっと愛おしく、大切に 22 世紀につなげていきたい！

それにしてもおばちゃんパワー、すごいね。日本を変えるのはやはり女性であるってこと、これをしっかり受け止めました。

渡邊智恵子